

認することが出来た。特に、今まで遺跡範囲内で確認されていなかった縄文後期中葉の上器が遺跡の東側、現菊川が流れる谷部において確認されたことが注目される。

今後の課題として、未発掘部分での縄文時代早期から近世にいたる時期の遺構の検出を行ってゆく。特に2トレの北側、東側の未調査部分の確認と、第2次調査1トレ周辺の精査は残された課題である。中屋敷遺跡周辺の状況についてもさらに踏査を行い、各時期の中屋敷遺跡周辺における人間活動の様相について調査してゆきたい。
(今井、佐々木、小泉)

おわりに

調査にあたってご理解と配慮をいただいた、小宮操氏ならびにご家族の方々に深謝したい。また、発掘および整理作業に真摯に取り組んだ参加者の熱意に拍手を送ると共に、暑い中現地に足を運んでくださった学兄に、この場を借りてお礼申し上げる。なお、今後の活動に向けて関係諸氏のご指導、ご教示を賜れば幸いである。

発掘調査および出土品の整理にあたっては、次の諸氏・諸機関のご協力、ご指導をいただいた(敬称略)。

伊丹徹、大井町教育委員会、大島慎一、大山正雄、加藤勝仁、財団法人かながわ考古学財団、東村山市下宅部遺跡調査団、昭和女子大学学園本部・東明学林・事務局・生活環境学科、田尾雅敏、谷口肇、守屋豊人

土器については井上賢、長岡史起、石器については秋本雅彦、倉石広太、陶磁器については斎藤潤花の指導を受けた

1) 第3次中屋敷遺跡調査団組織

調査顧問：櫻井清彦(昭和女子大学特任教授)、団長：スチュアートヘンリ(同教授、日本文化史学科長)、調査指導：吉成薫(同助教授)、山本暉久・御堂島正(同非常勤講師) 調査主任：小泉玲子(同助教授)、調査員：佐々木由香・館まりこ・今井明子・藤井恵(同大学院生活機構研究科)、調査員補助：石井寛子・領家玲美(日本文化史学科4年)、調査補助員：櫻井弥生・鈴木由貴子・瀬戸山由紀・多崎美沙(同3年)、江川真澄・大沼香織・田村知子・早勢加菜・峯尾愛美(同2年)、布施沙織・古沢佑季子(同1年)

参考文献：

館まりこ 他 2001「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第2次調査報告書(2000年度)」・「神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第2次調査出土物報告」(『昭和女子大学文化史研究』第5号 昭和女子大学文化史学会)

口径9.2cm、底径4.0cm、器高1.9cm。19世紀前半から中頃の製品である。

7は京・信楽系の杉形碗である。高台は残存していない。体部外面には鉄釉によって若松文が描かれている。18世紀後半から19世紀前半にかけての製品である。(館)

6 調査の成果と今後の課題

第1次調査から第3次調査によって得られた土器・陶磁器の所見をまとめる。

土器の総点数は267点である。時期は縄文時代早期後半、前期後半から中期初頭、中期後半、弥生時代初期、前期後半から中期初頭に比定される土器片を確認することができた。調査区内において最も点数が多いのは5群（弥生時代初期）の土器片で150点確認しており、そのうち条痕文が施文される甕形土器が全体の90%以上を占める。また、昭和8年に容器形土偶が出土した地点であるA区では弥生初期、中期の出土が多い。調査区内で標高が高く、台地上にあるE・F・G区では1群（早期後半）の土器片が出土し、表採もできたが、最も標高の低いA区では確認されていない。また、G区で土師器杯が1点表採されているが、時期は不明である。

陶磁器の総点数は222点である。時期は18世紀後半から19世紀初頭以降の製品を中心とし、17世紀代から19世紀後半にかけての製品が認められた。陶器と磁器の割合はやや磁器のほうが高く、器種は磁器では碗、蓋、皿、小杯、徳利、紅猪口、灯明皿、油壺、陶器では碗、蓋、皿、鉢、土瓶、徳利、瓶類、甕、火鉢、灯明皿、

地点名/時期	縄文時代					弥生時代			土器	合計
	遺跡範囲内	1群	2群	3群	4群	不明	5群	6群	不明	
A 表採	0	0	0	1	2	8(3)	0	0	1	12(15)
A 1pit	0	1	0	0	0	16	1	0	0	18
A 1トレンチ	0	3	0	0	2	43	1	0	28	77
B 表採	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
C 表採	0	0	1	0	0	3	0	0	1	5
D 表採	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E 表採	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E 4pit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E 5pit	3	2	0	0	0	0	0	0	1	6
F 表採	3	0	1	2	0	12	0	1	9	28
F 2pit	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3
F 2トレンチ	2	3	12	1	3	58	0	2	5	86
G 表採	2	1	5(1)	0	1	6	0	3	6	24(25)
H 3pit	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
地点不明表採	0	0	0	0	0	4	0	0	2	6
合計	13	10	19	4	8	150(3)	2	6	56	267

遺物の点数は破片数で数える。()は口縁部。

層位はカウントの際に考慮していない

これまでの調査および予備調査で得られた遺物をカウントした(陶磁器は除く)

表1 検出土器の傾向

3は深鉢の胴部である。V字形の工具による鋭い沈線が格子目状に引かれる。胎土はやや粗く、石英、凝灰岩、角閃石、白色粒子を含む。加曾利B式に比定される。

5群 A地点4点、C地点1点、F地点3点、G地点1点。Fi4地点で2点表採。

A・F地点はこれまでの発掘調査区が含まれ、弥生時代初期の遺物・遺構が確認されている。

4は広口壺の頸部～胴部破片である。頸部は括れ、胴部は外反する。横方向と左下がり沈線が施される。内外面ともにナデ。胎土は緻密で石英、凝灰岩を含む。F地点表採。

5は甕の口縁部である。やや外反横方向に不規則な細い沈線が引かれる。内面工具によるナデ。胎土はやや密で石英、凝灰岩、白色粒子を含む。遺跡外Fi4地点表採。
(佐々木)

(2) 陶磁器 (図11-6・7、写真は省略)

陶磁器は遺跡内で、陶器8点、磁器23点、遺跡外ではFi1区で磁器2点、Fi2区で陶器1点、磁器1点、Fi3区で陶器1点、Fi4区で陶器3点表採できた。時期が比定できかつ特徴的なものについては図化を行った。

6は瀬戸美濃系の灯明皿で、全面に鉄釉を施した後、体部外面を拭き取っている。

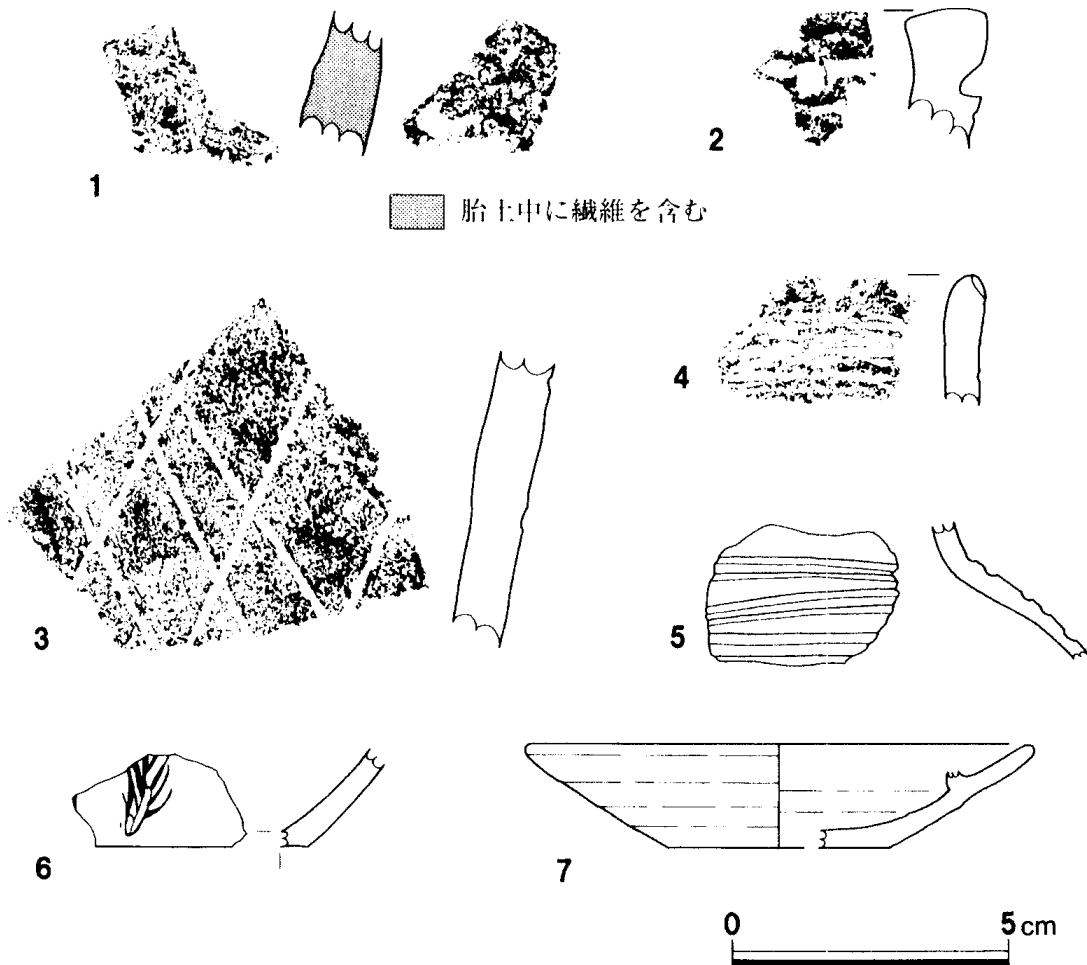


図11 事前調査表採遺物 (S=1/2)

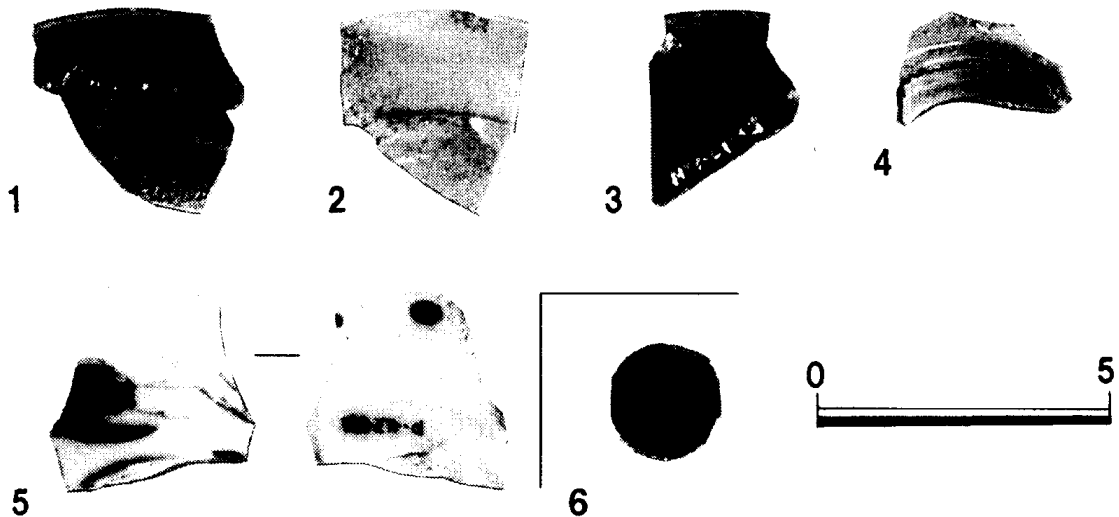


写真5 陶磁器・土製品

(4) 土製品 (図10-6, 写真5-6)

土製の弾碁玉である。碁石状を呈する。幅2.0cm、厚さ0.5cm、重量2.0gである。
e区1層出土。 (今井)

5 事前調査および周辺調査採集遺物

事前調査および周辺調査で採集した遺物を土器、陶磁器と分けて報告する。また各地点の表採土器の点数は表2に、表採地点は図1-1に示した。

(1) 土器 (図11-1～5、写真は省略)

土器は遺跡内から24点、遺跡外ではF区東側の谷部にあたるFi3区で1点、遺跡南西にある「金子台」と呼ばれる段丘面の西側斜面であるFi4区から5点表採できた。土器を時期ごとに示し、特徴的なものについては図化を行った。

1群 F区で1点、Fi4区で2点表採。

1は深鉢の胴部である。外反する土器で、外面には縦方向の撚糸文、内面には左下がりの沈線?が施文される。胎土はやや粗く、白色粒子を多く、角閃石、石英を含む。縄文時代早期に比定されると思われるが詳細な時期不明。F区表採。

3群 C区で1点、G区で2点表採。

2は深鉢の口縁部である。平縁で口縁付近に横方向の沈線が引かれ、刺突が施される。また刺突を開むように沈線が引かれる。胎土はやや粗く、角閃石、礫を含む。G区表採。

縄文時代後期中葉に比定される土器 Fi3区で1点表採。

遺跡範囲内では、これまでの発掘調査および表採において当該期に比定される土器は認められていない。今回遺跡の東側の谷にあたるFi3区で1点のみ表採できた。

あった。黒曜石は石材産地分析を行っていないため、産地は不明であるが、第2次調査の所見と同じく、異なる特徴を有するものがいくつか存在することから、複数の産地及び遠隔地から搬入された石材を利用したと推定される。

今年度の調査の一つの成果として、時期を比定できる土器が出土している層位から磨石（6層）、磨製石斧（7層）が出土した点が注目される。（藤井）

(3) 陶磁器（図10-1～5、写真5-1～5）

陶磁器はd区から27点、e区から6点、遺跡内で36点表採できた。器種は碗、皿、灯明皿、瓶、徳利などが確認されている。いずれも小破片であるが、そのうち特徴的なものを報告する。

1は信楽系陶器の灯明受皿の口縁部破片である。内面に透明釉を施した後、体部外面を拭き取っている。外面は口縁部近くまで回転ヘラケズリが施されている。口縁部外面にススが付着している。口径10.3cm、残存高1.4cm。19世紀以降の製品である。F区表採。

2は瀬戸・美濃系陶器の灯明受皿の口縁部破片である。全面に鉄釉を施した後、体部外面を拭き取っている。外面は口縁部近くまで回転ヘラケズリが施されている。内面の受けの先端と、体部外面に重ね焼きの痕跡が残る。口径10.0cm、残存高1.7cm。18世紀後半以降の製品である。d区1層出土。

3は灯明皿の陶器口縁部破片である。全面に鉄釉が施された後、体部外面を拭き取っている。口径、残存高2.0cm。d区1層出土。時期、産地は不明である。

4は瀬戸・美濃系陶器の灯明台の皿受の体部破片である。全面に透明釉を施している。d区1層出土。時期は不明である。

5は瀬戸・美濃系磁器の蓋である。口縁部内面には2条、外面には1条の圏線、胴部外面には鳥が染付されている。口径は10.0cm。19世紀代の製品である。d区1層出土。（今井）

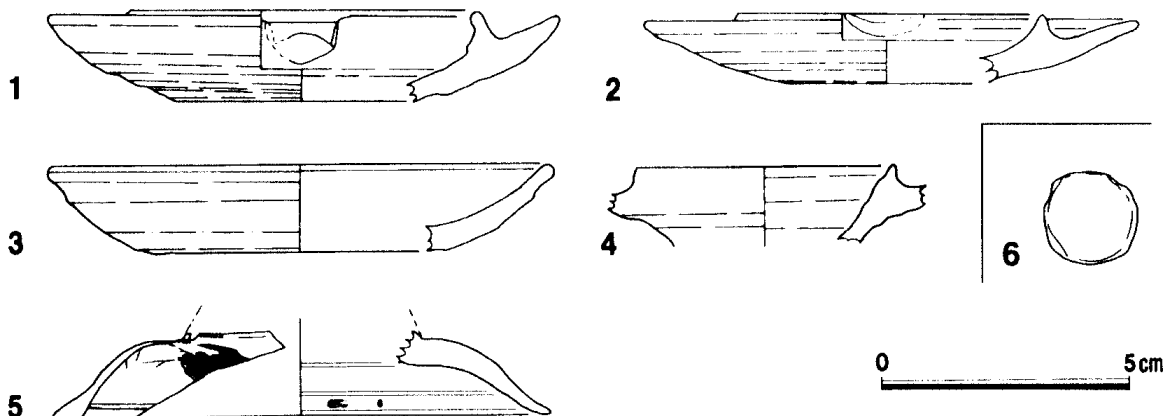


図10 陶磁器・土製品実測図（S=1/4）

2.11cm、厚さ0.28cm、重量1.8g。e区1層出土。

3は凝灰岩製の磨製石斧である。礫面を有する剥片を局部的に磨製した刃部を持つ。左側縁の観察によると、剥離の後、敲打を行い、その後磨いたことが認められる。右側縁には折れ面が確認されるが、これはどの段階で折られたのかは判断が難しく、磨いた後に折られたものであれば再利用の可能性も考えられる。長さ7.1cm、幅3.98cm、厚さ1.75cm、重量51.1g。d区6層出土。

4は凝灰岩製の二次加工を有する剥片である。板状の剥片の素材として左側縁部に刃部を持つ。正面から幅広の剥離を連続的に施すことにより、裏面に刃部を作り出している。長さ6.49cm、幅6.58cm、厚さ1.51cm、重量77.2g。F区表採。

石器の石材は、出土した14点の内、12点が黒曜石、2点が凝灰岩、1点が斑脇岩で

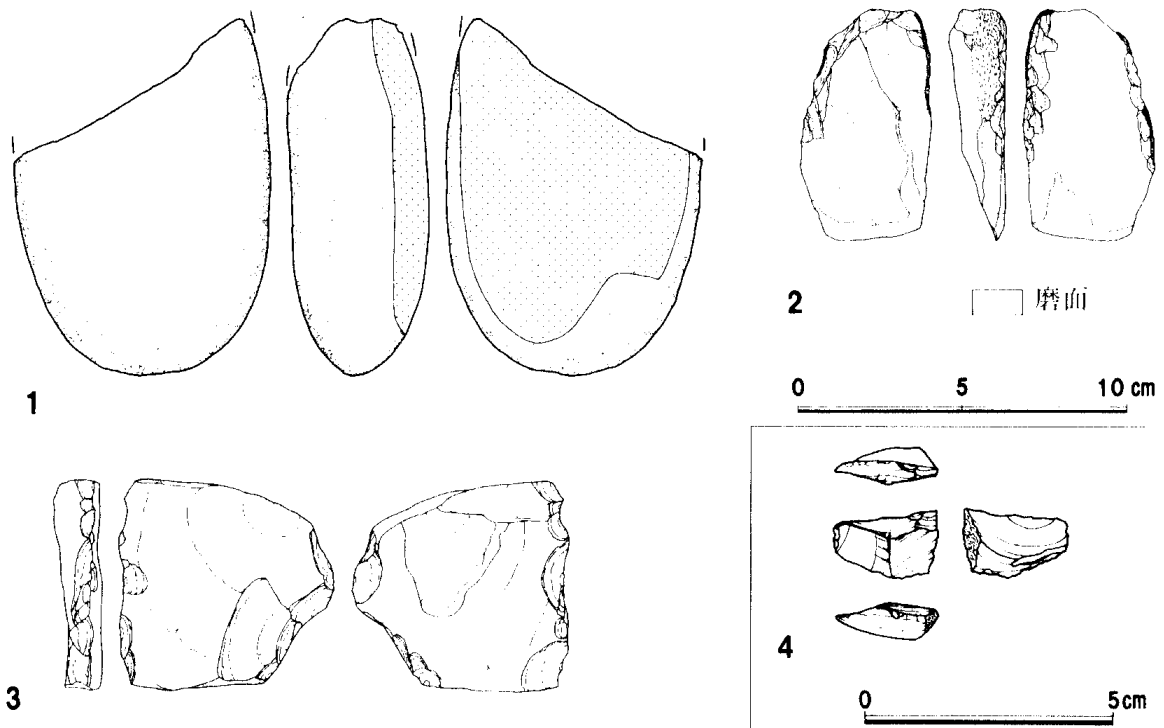


図9 石器 (1~3 S=1/3、4 S=1/2)

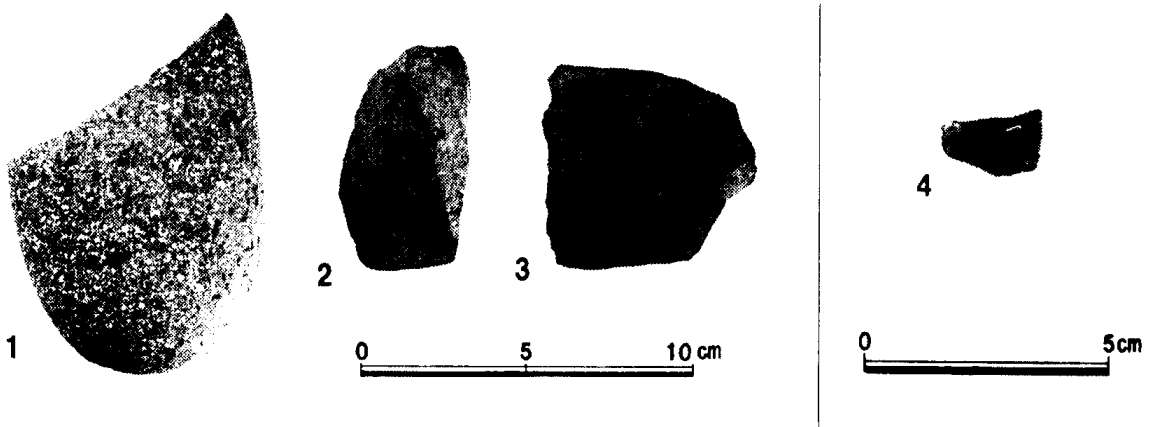


写真4 石器 (1~3 S=1/3、4 S=1/2)

む。加曾利E式に比定される。b区5層出土。

9は深鉢形土器胴部上半の破片である。縦方向の条線を施文した後、3~4本を1単位とする沈線により弧線と垂下する沈線が描かれる。胎土はやや粗く、小礫、角閃石、石英を含む。加曾利E式に比定される。b区5層出土。

4群 縄文時代晩期末葉に比定される土器群

10は広口壺の口縁~頸部破片である。口縁部付近は節の細かいLR縄文が施文され、頸部および内面は横方向のナデ。第2次調査時、2号土坑で出土した広口壺と同一個体である。b区1層出土。

11は広口壺の口縁部及び胴部破片である。口縁部付近に横方向の細めの沈線が施文されている。内外面ヘラミガキ。残存状況が悪いが、口縁部、胴部ともに焼成後外面に赤彩されている。ともに第2次調査時、2号土坑出土のNo.10土器(図8)と同一個体である。F区表採。

5群 弥生時代初期に比定される土器群

12は甕形土器の胴部破片である。横方向に近い右下がりの不揃で細茎束条痕が施文される。内面は工具による横方向のナデで、輪積み痕を一部で明瞭に残す。

胎土はやや緻密で小礫、白色粒子、石英、角閃石を含む。d区攪乱出土。

13は甕形土器の胴部破片である。縦方向に近い右下がりの不揃で細い茎束条痕が施文される。内面は横方向のナデ。胎土はやや緻密で多量の角閃石、小礫、石英を含む。C区表採。

14は甕形土器の胴部破片である。横方向に近い右下がりの不揃で細茎束条痕が施文される。内面は横方向のナデ。胎土は粗く雲母、白色粒子、石英、小礫を含む。d区2層直上出土。
(今井、藤井)

(2) 石器 (図9、写真4)

石器は、2トレ付近で表面採集された1点を含め計14点出土した。器種は、剥片5点、使用痕のある剥片1点、二次加工を有する剥片1点、破片4点、石核1点、磨製石斧1点、磨石1点である。そのうち特徴的な器種について報告する。

1は斑^{はんれい}岩製の磨石である。一部欠損しているが、円礫を素材として、扁平な部分に磨面を残している。長さ1.5cm、幅7.78cm、厚さ4.26cm、重量467.2g。b区7層出土。

2は黒曜石製の使用痕を残す剥片である。4辺に微細な剥離を有する。上端は折損によって鈍角となった部分を刃部としていることが観察できる。長さ1.41cm、幅

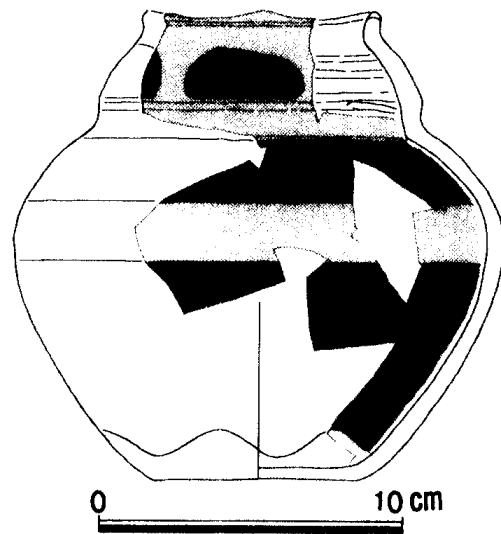


図8 2号土坑出土No.10土器(S=1/4)

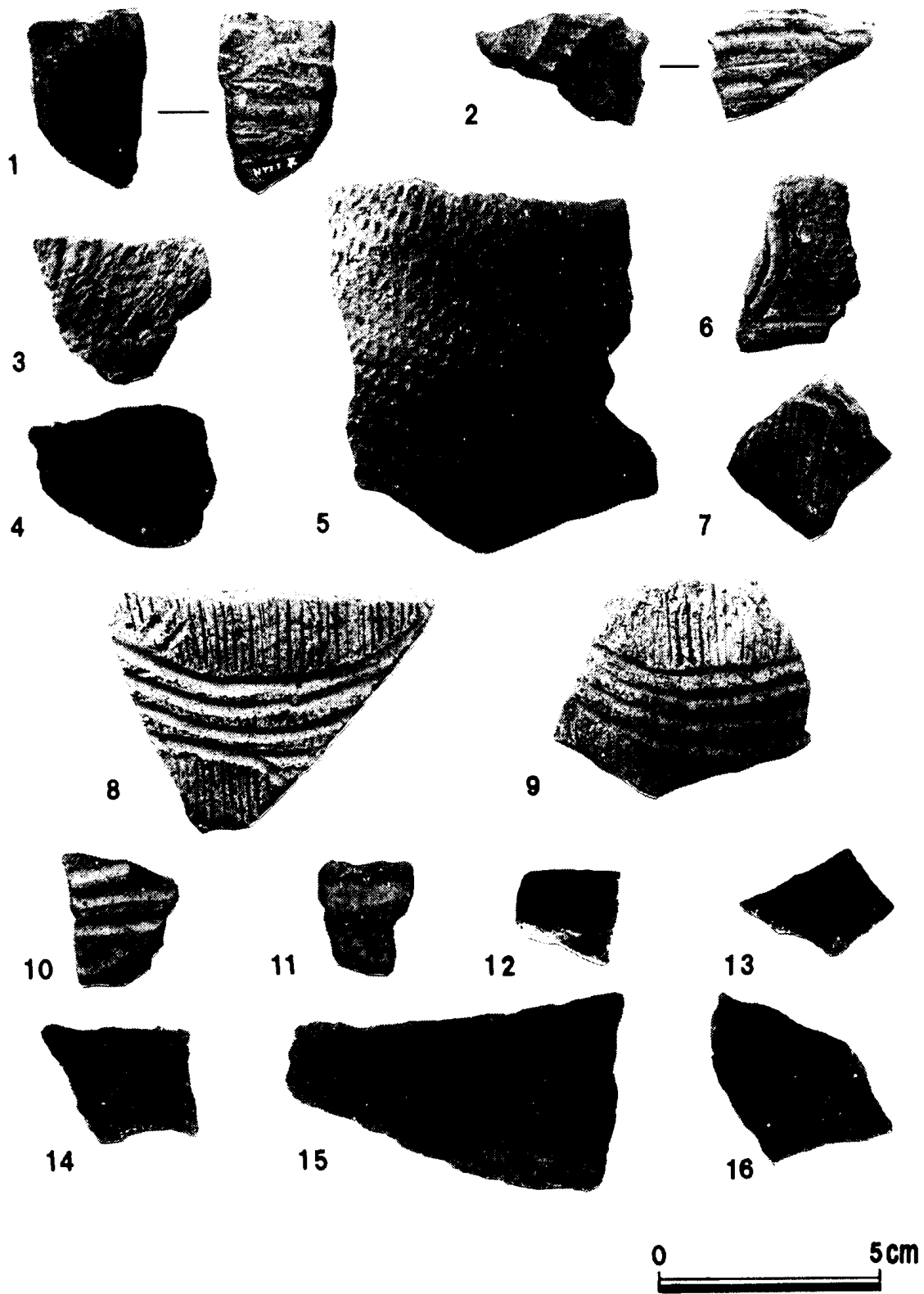


写真3 出土土器

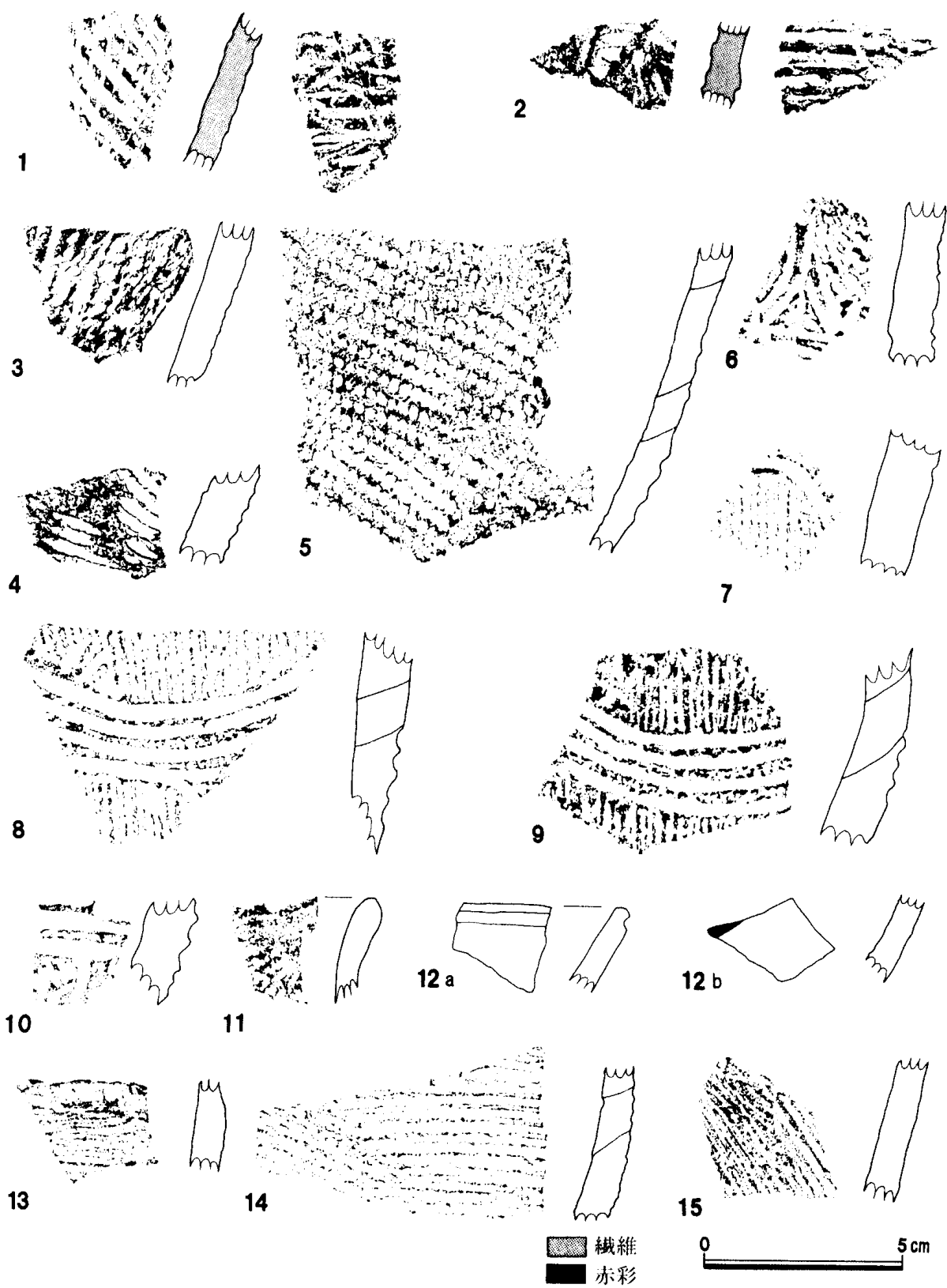


图7 出土土器实测图 (S=1/2)

遺物はe区5層、7層から縄文時代前期前半から後半の土器、磨石、d・e区1層（表土層）からは縄文時代前期、中期、弥生時代初期の土器、17世紀代から19世紀代の陶磁器が出土した。（今井）

4 出土遺物

中屋敷遺跡第3次調査の出土遺物（土器、石器、陶磁器、土製品）について時期ごとに報告する。

(1) 土器（図7、写真3）

第3次調査では縄文時代早期後半、前期後半、中期後半、晩期末葉から弥生時代初期に比定される土器が出土した。2トレから約25点、遺跡内で表採した土器片は40点である。以下、昨年度の報告で示した1～6群の分類案（館他2001）に基づき、群ごとに特徴のある資料を報告する。なお、本年度は第6群に比定される遺物は出上していない。

1群 縄文時代早期後半に比定される土器群

1は深鉢形土器の胴部破片である。外面は地文を貝殻条痕とし、その上にやや粗い細沈線が施される。内面は横方向の浅い条痕が施される。胎土は繊維、石英、砂粒を含む。鶴ヶ島台式に比定される。F区表採。

2は深鉢形土器の胴部上半の破片である。外面は細隆起線による斜め方向の区画内に沈線を充填している。内面は横方向の貝殻条痕が施される。胎土は繊維、石英、白色針状粒子を含む。鶴ヶ島台式に比定される。G区表採。

2群 縄文時代前期後半～縄文時代中期初頭に比定される土器群

3は深鉢形土器の胴部破片である。単節縄文RLが施文される。胎土は多量の雲母、石英を含み砂質である。五領ヶ台式に比定される。粗製土器である。e区7層出土。

4は深鉢形土器の胴部破片である無節縄文Lが施文される。縄文中期に比定される。

5は深鉢形土器の胴部破片である。2種類以上の単節縄文LRが施文される。胎土は白色粒子、小礫を含む。前期後半に比定される。e区5層出土。

6は深鉢形土器の胴部上半の破片である。半截竹管により文様が施される。胎土は雲母、小礫、石英を含む。前期後半に比定される。b区1層出土。

3群 縄文時代中期後半に比定される土器群

7は深鉢形土器の胴部上半の破片である。縦方向の条線を施文した後、区画文が描かれる。胎土はやや粗く、小礫、角閃石、石英を含む。加曾利E式に比定される。d区6層出土。

8は深鉢形土器胴部上半の破片である。縦方向の条線を施文した後、3～4本を1単位とする沈線により弧線が描かれる。胎土はやや粗く、小礫、角閃石、石英を含

在も農作業のための道として使用されており硬質化が著しく、手掘りが困難なため一部調査を行っていない。d区の上層確認は東壁と南壁で行い、調査期間の問題から8層上面まで、e区も上層確認は東壁と南壁で行い調査区の東側約1/2を8層途中、西側を8層上面まで掘り下げた(図5)。

その結果、遺構は、畝状遺構と道状遺構が検出された。また、e区において溝状遺構を検出した(図6)。畝状遺構は2層直下で確認された。北東から南西方向に切り合いながら3条から4条延びている。その方向性から調査区外に延びていくものと思われる。また、畝に沿って所々に幅約20cm前後、深さ3~8cmほどの浅い掘り込みが列状に確認でき、鋤の痕跡と考えられるが不明瞭である。畝の窪み部分に堆積している室永スコリアは2次堆積と考えられる。道状遺構は畝状遺構を切つて6層から7層までを掘り込むかたち

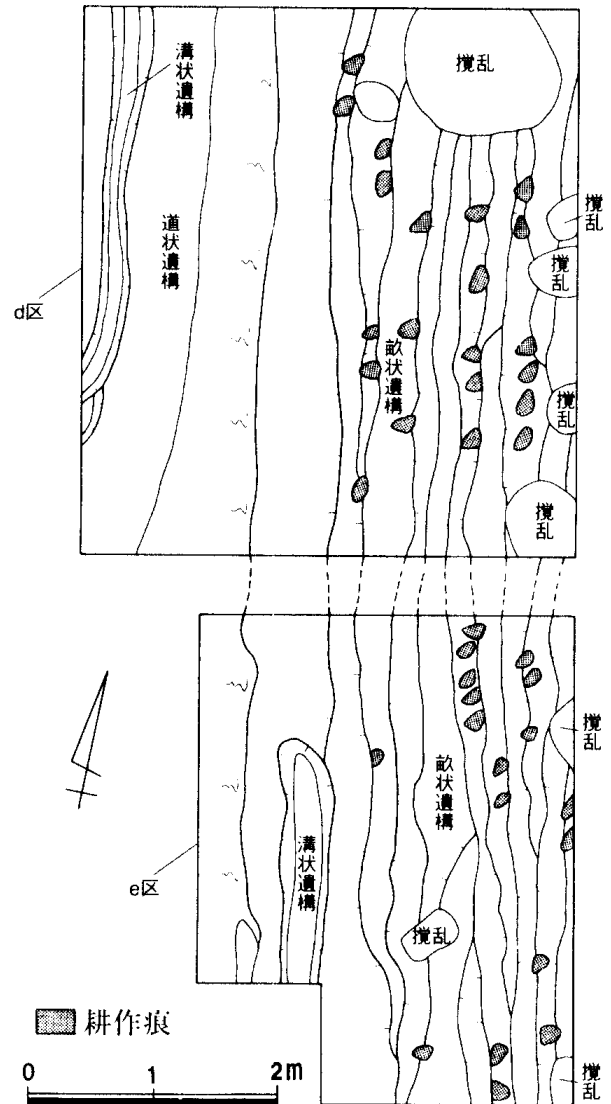


図6 d・e区 遺構検出状況 (S=1/80)

で硬化面を形成しており、硬化面は2層確認された。道は南北方向に延び、道の東側には側溝が検出された。e区において検出した溝状遺構は、畝状遺構を切り込んで作られている。これらの遺構の時期はいずれも2層堆積後の江戸中期以降、表土層形成以前である。

また第2次調査a区において7号土坑として報告した遺構は、堆積状況を再度確認したところ、2層直下の畝状遺構を切って作られていることから、構築時期は江戸中期以降であることは変わらないが、覆土は室永スコリアからローム粒子までを多量に含むこと、現代の生活用品も混じっていることから攪乱の可能性が高くなった。

a・d・e区は、目的としていた第3層の面的な確認、遺構・遺物の検出が出来なかった。2層直下で検出された畝状遺構、道状遺構などが構築されたほぼ同じ時期の掘削により包含層が破壊されていると考えられる。上層はd・e区共に2層までは平坦に堆積し、2層以下は南側へ向かって傾斜して堆積していることから、旧地形は北から南へと傾斜していたと考えられる。

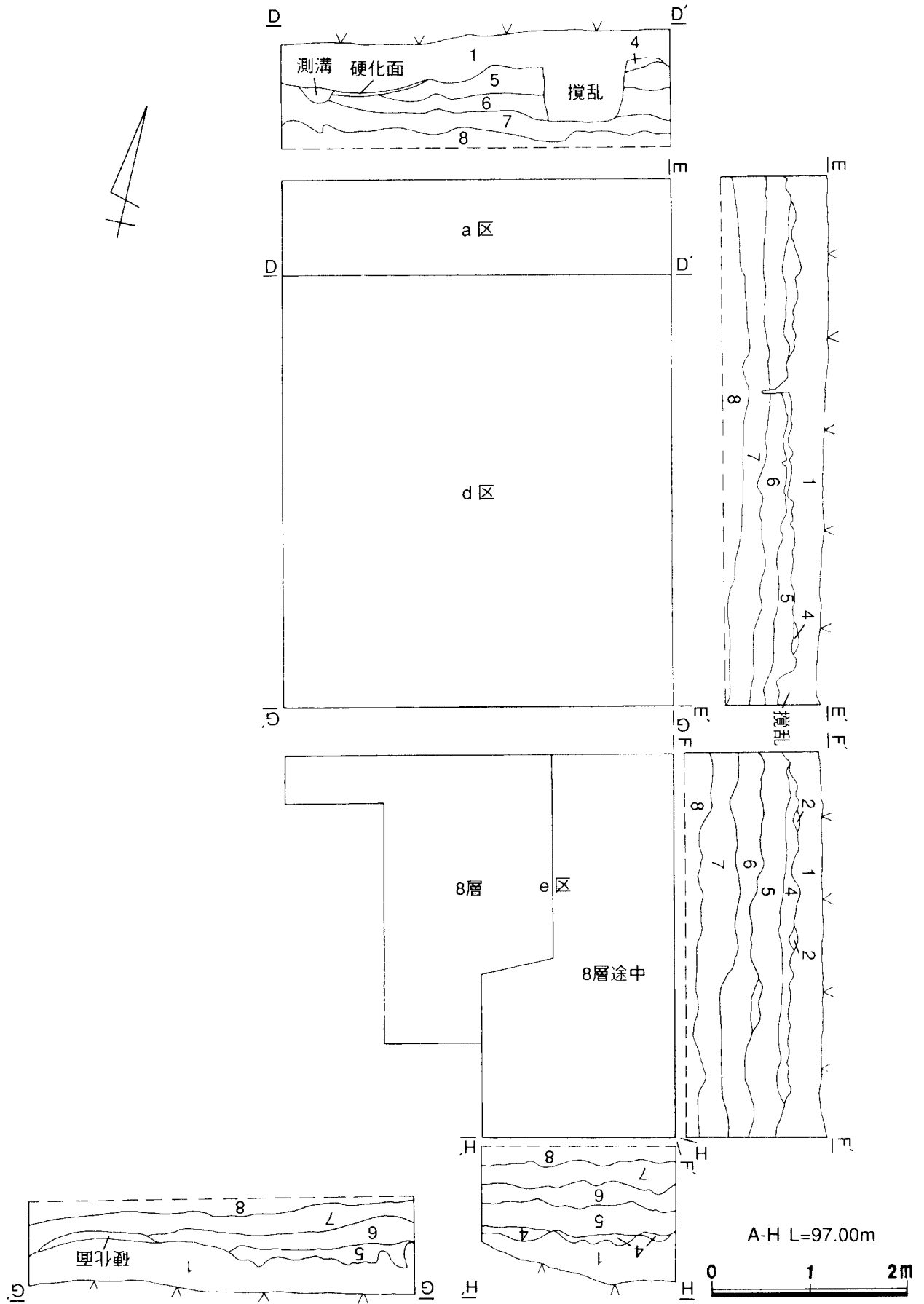


図5 第2トレンチa・d・e区 (S=1/80)

下げる形で調査を行った。b区は南北5.5m×東西2.0m、c区は南北4.5m×東西2.0mのトレンチである。最終的には、b区とc区間に土層確認用に残した50cmのベルトを取り外したため、あわせて南北10m×東西2mの20㎡のトレンチとなった(写真1)。

調査は西側に50cmのサブトレンチ(以下サブトレ)を設定し、先行して掘り下げた。サブトレ内で10層を確認したが、サブトレ以外はほかの地区で遺物が出土している8層まで面的に調査することにし、b区が8層上面まで、c区が9層上面まで調査を行った。図3は調査終了状況を示した。土層は5層より上層は平坦に堆積しているが、6層以下は南に向かってわずかに傾斜し、10層に関しては調査区中ほどからさらに傾斜が強まっている。このことにより、旧地形は北から南に向かって傾斜していたことが推定される。

遺構は、第2次調査で一部を確認していた8号土坑が、b区・c区間に設定した土層観察用のベルトをはさむ形で存在することが想定された。そこで、ベルトを除去して確認したが、覆土の堆積状況から風倒木であると判断した。また、b区で11号土坑を検出した(写真2、図4)。この遺構はb区中心付近の攪乱を取り去った下の5層で確認された。上面は一部攪乱を受けているが直径約70cm程度のほぼ円形を呈するものと考えられる。底面も円形を呈し、確認面からの深さは79cmである。遺構に伴う遺物が検出されなかったことから、性格・年代を特定するには至らなかった。

出土遺物は、土器が5点(図7)、石器が2点(図9-1、3)出土している。中でも5層から加曽利E期に比定することの可能な土器が2点(図7-5、7、9)出土している点と、今までの調査で遺物の出土が認められなかった6層から石器が1点、縄文早期後半から前期後半の土器が出土する7層から石器が1点確認されていることが注目される。

(藤井)

(2) a・d・e区

a区は南北1.0m東西4.0m、d区は南北4.5m東西4.0m、e区は南北4.0m東西4.0mで設定し、d・e区間に0.5mのベルトを設けた。しかし、e区南西部分は現

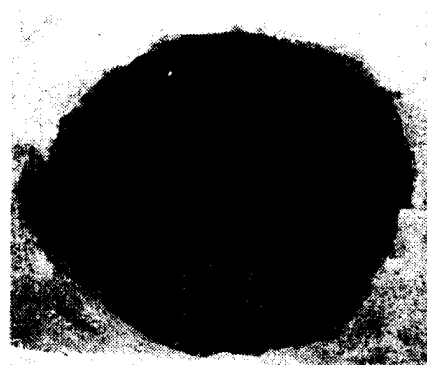


写真2 11号土坑

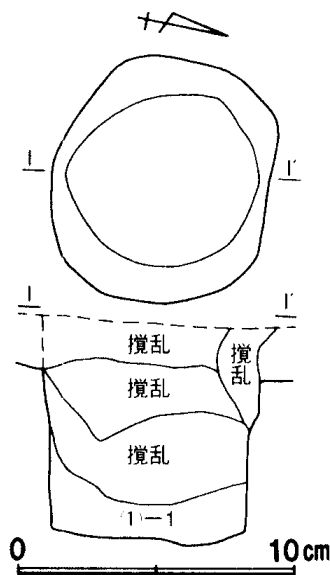


図4 11号土坑

①-1層 黒褐色土層。径1mm程度の橙色スコリア、径1mm以下の白色スコリア、径5mm程度の小礫を含む。粘性ややあり、しまりややあり。

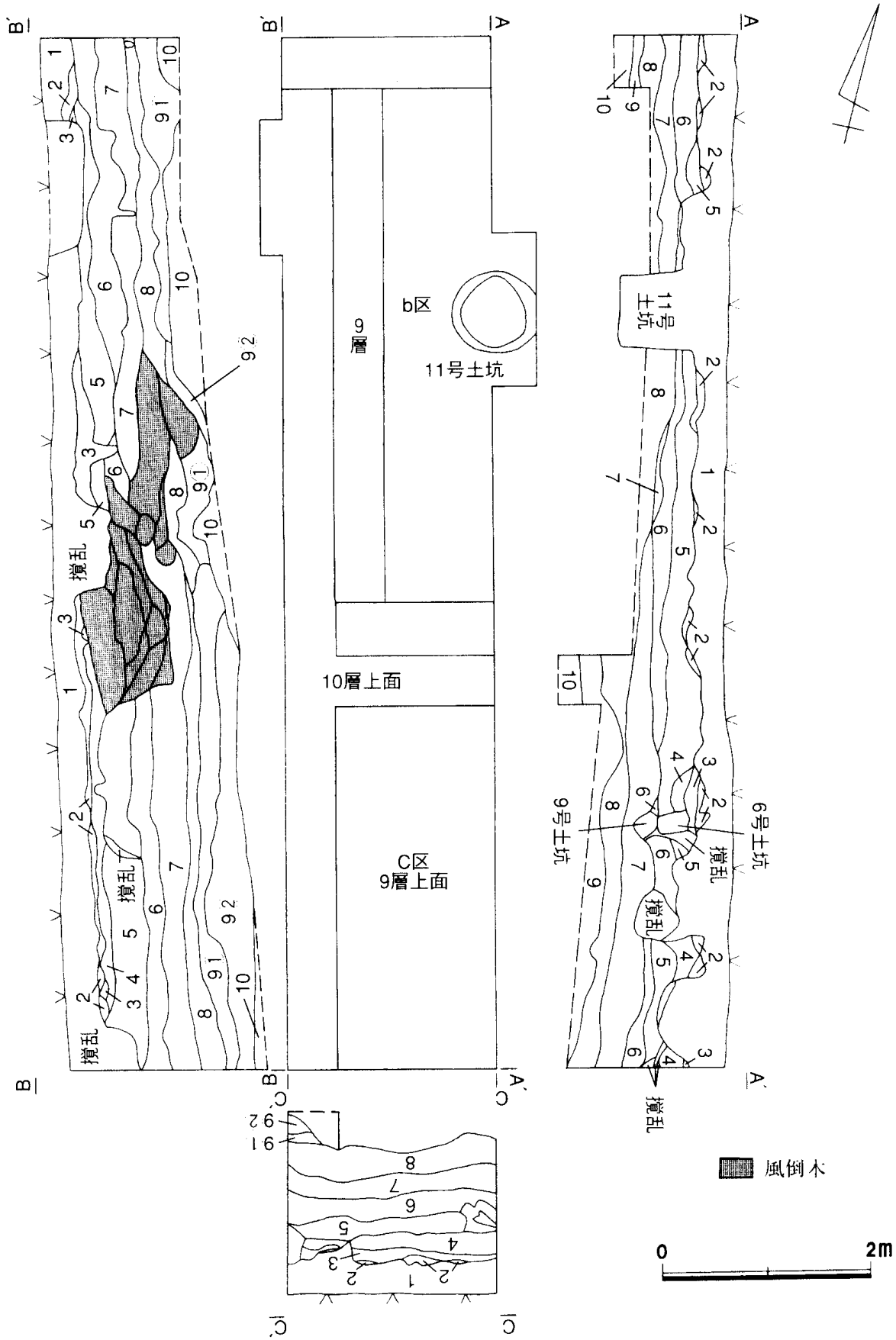


図3 第2トレンチb・c区 (S=1/80)

1層 **表土層**：約30～40cmの厚さで堆積している耕作土。現代～縄文時代の遺物を含む。

2層 **黒灰色スコリア層**

(S-25=HO)：1707年の宝永年間に堆積した火山灰層。攪乱されており、2次堆積によるものと思われる。

3層 **明褐色土層**：弥生時代初期の遺物を含む。

4層 **黄褐色土層**：弥生時代初期の遺物を含む。

5層 **黒褐色スコリア層①**：縄文時代前期末～中期初頭、中期後半の遺物を含む。11号土坑の遺構確認面。

6層 **黒褐色スコリア層②**：遺物は検出されていない。

7層 **橙色スコリア層①(富士黒土層)**：縄文時代早期後半～前期後半の遺物を含む。

8層 **橙色スコリア層②**：縄文時代早期後半～前期後半相当層。遺物は検出されていない。

9-①層 **明黄褐色土層①(漸移層)**：基本層序の第9層に類似するが、より暗い色調でしまりがある。径8mm～10mmの橙色スコリアを多く含み、径10mm程度の黒色スコリアと径4～5mmの赤色スコリアを含む。基本層序の第9層よりもスコリアの粒が大きい。遺物は検出されていない。

9-②層 **明黄褐色土層②(漸移層)**：基本層序の第9層に相当。遺物は検出されていない。

10層 **黄褐色土層(関東ローム層)**：遺物は検出されていない。

11層 **黄褐色土層(関東ローム層)**：本年度は未調査。

12層 **黄褐色土層(関東ローム層)**：本年度は未調査。
(藤井)

3 調査の概要

(1) 調査区 b・c 区

第2次調査でb区は5層直上まで、c区は6層までの調査で終了した。第3次調査では第2次調査終了面を検出後、b・c区をさらに掘り

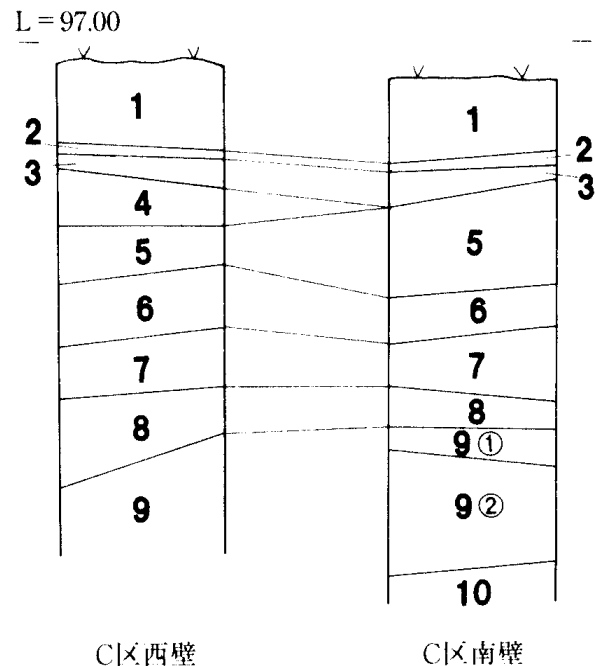


図2 標準土層柱状図



写真1 b・c区

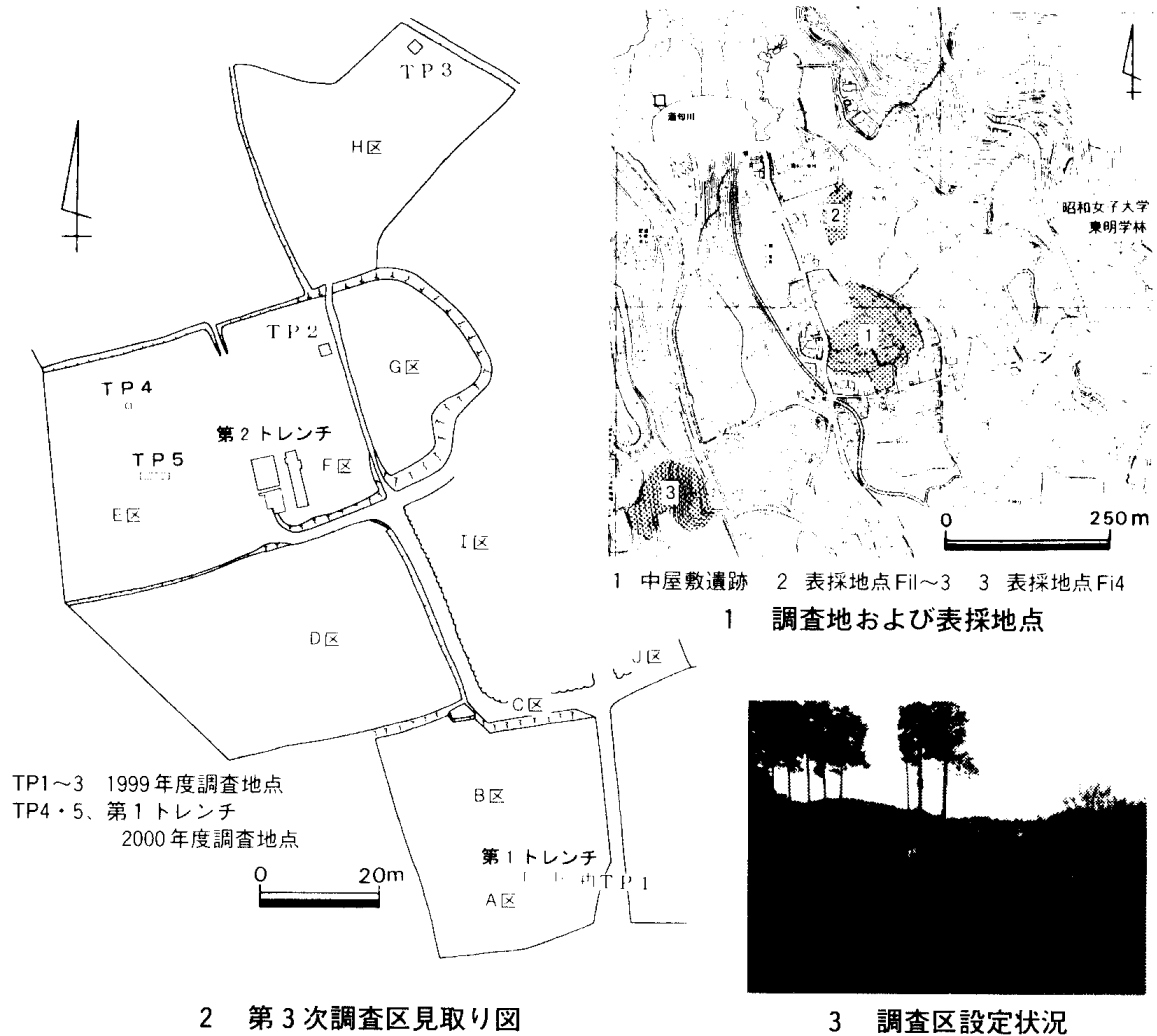


図1 調査地・及び調査区

掘り下げを終了していたが、南壁面にかかった遺構の確認と、d・e区の掘り下げに際して上層を参照するため再度検出した。調査区ごとの詳細は後述する。測量班は基準杭の設定、レベル移動、トラバース測量、コンタ図の作成を行った。8月6日には調査を終えたa区の埋め戻しを行い、7日にd・e区、8日にb・c区を埋め戻し、調査を終了した。

調査中は東明学林に合宿し、毎晩ミーティングを行い、整理作業も一部実施した。本格的な整理作業は9月より世田谷キャンパスにおいて大学院生を中心に発掘参加者で実施した。

(小泉)

2 標準層序 (図2)

層序は基本的に第2次調査の層序(以下基本層序)に準じるが、9層を細分するなど若干の訂正を行い13層に分層した。以下に各層の特徴と第3次調査で得られた所見を記す。第2次調査と同一の層の記載(館他2001)は紙面の都合上簡略に記した。

調査報告

神奈川県足柄上郡大井町中屋敷遺跡第3次調査報告(2001年度)

今井明子 藤井 恵
館 まりこ 佐々木 由香
小泉玲子

はじめに

中屋敷遺跡は、弥生時代初期を主体とする複合遺跡であり、この報告は第3次調査の概報である。本調査は2000年度に実施した第2次調査(館他2001)をもとに計画実施している。以下、調査の目的と経過、層序、調査区、出土遺物について報告し、発掘調査と併行して実施した調査地周辺の表面採集の成果についても報告する。その上で3次にわたる調査の成果と今後の課題についてまとめた。

調査および整理作業は中屋敷遺跡第3次調査団りを組織して実施し、本概報は今井、藤井、館、佐々木、小泉で分担した。担当部分については項目末に記した。なお、調査は日本文化史学科事業として取り組み、同時に私学助成財団より「特色ある教育研究の推進」として採択を受けている。

1 調査の目的と経過(図1)

第3次調査は、第2次調査第2トレンチ(以下2トレ)で検出された弥生時代初期に位置づけられる2号土坑に関連する遺構・遺物の確認を主体とし、発掘区をF区に限定した(図1-2)。また、第1次調査で縄文時代早期に比定される土器片が出土し、当該期の遺構が調査区内に存在する可能性も想定されることから、第2次調査以後は遺構確認のため第10層(ローム面)上面まで掘り下げることが調査方針としている。また、第2次調査で時間の制約から一部未終了となった部分の再調査も兼ねている。さらに、2トレ周辺において中世、近世の遺物も出土していることから、この時期の遺構検出も視野に置いた。さらに、旧地形の把握、遺跡内及び周辺の表面採集(以後表採)、地形図の作成を目的として実施した。

2001年3月26日に地主と調査区の打ち合わせで調査地を訪れた機会に遺跡内、および周辺の踏査を実施した。その際の表採遺物は、発掘調査中にも一部実施した周辺踏査と合わせて事前調査および周辺踏査表採遺物として後述する。包含地として遺跡台帳に掲載されていない表採地点は図1-1に示した。

発掘調査は7月26日から8月8日までの14日間で実施し、作業は発掘班と測量班に分かれて行った。発掘班は、第2次調査の調査区である2トレのa・b・c区を確認・設定後、新たにd・e区を設定した。a区は第2次調査で10層上面まで